

今も日本フィルに息づく 創立指揮者・渡邊暁雄の理念



2019年は日本フィルハーモニー交響楽団の創立指揮者、渡邊暁雄(1919年6月5日～90年6月22日)の生誕100周年を記念する年だ。父は日本人の牧師、母はフィンランド人の声楽家。国際ジャーナリストとして名を成した兄の忠恕は北欧人の風貌、弟の暁雄はもっと日本的な顔立ちだったが、長身痩躯の美男子で、どこにいても目立つ存在だった。信子夫人は鳩山一郎元首相のお嬢さんと、恵まれた環境に身を置いていた。

1934年(昭和9年)から戦時中の42年にかけて東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)でヴァイオリンを専攻するかわら、日本のオーケストラ界の礎を築いたユダヤ系ドイツ人マエストロ、ヨーゼフ・ローゼンシュトック(1895～1985)に指揮を学んだ。戦後の48年に東京フィルハーモニー交響楽団の初代常任指揮者に就いて正式デビュー。50～52年には日本の指揮者として初めて米国へ留学、ニューヨークのジュリアード音楽院でフランスから米国へ渡ったジャン・モレル(1903～75)の教えを受けた。

ともに戦後のニューヨークでドイツ歌劇、フランス歌劇の指揮者としても活躍したローゼンシュトック、モレルの薫陶を受けたことで渡邊は、それまでの日本の指揮者になかった感覚、価値観を育んだ。帰国後の56年、文化放送による日本フィルの設立に深くかわり、初代常任指揮者を引き受けたとき、渡邊の脳裏には「ドイツ音楽一辺倒の日本楽壇に風穴を開けたい」との理念が、今日の私たちの想像以上にはっきりした形で宿っていたようだ。具体的には、1)母の国フィンランドのシベリウスをはじめとする北欧音楽、2)モレル直伝のフランス近代音楽、3)米国の同時代音楽、4)「日本フィル・シリーズ」と名づけた日本の作曲家への委嘱新作の4つの柱が念頭にあった。昔も今

も日本楽壇の「雄」として君臨するNHK交響楽団(N響)の重厚長大なドイツ・オーストリア音楽偏重路線に対する、明らかなアンチテーゼ(対立命題)の旗揚げであった。

渡邊はヴァイオリン&ヴィオラ奏者の経験、米国仕込みの合理主義に基づき、それまで日本のオーケストラ界が達成できなかった水準の正確な音程、透明で色彩豊かな音色を日本フィルに与え、短期間で優秀なアンサンブルを整えた。創立3年後の59年には米国の作曲家たちが出資し、ウィリアム・シューマンが社長を務めていたCRI(コンポザーズ・レコード社)と契約、翌年にかけてコーブランド、バーバー、ロイ・ハリス、ホヴァネスら当時の同時代作品15作を7枚のLP盤に録音した。これが北米での日本フィルの知名度を一気に高め、後の演奏旅行や客演指揮者の招聘に大きな力を発揮する。

63年にはニューヨークで行われたディミトリ・ミトロプーロス(1896～1960=ギリシャ出身で米国へ渡り、ニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者を務めた)記念国際指揮者コンクールの審査員に招かれ、審査委員長のリナード・バーンスタイン(1918～90)と旧交を温めた。この時はクラウディオ・アバドとズデニェク・コシュレル(コシュラー)が1位を分け合い、2位がモーシェ・アツモン、3位が若杉弘。アツモン以外は鬼籍に入ったが、全員が日本楽壇に大きな足跡を残した。90年、札幌市で国際教育音楽祭パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)を立ち上げたバーンスタインは開会式で渡邊の死を「友人」として悼み、「まもなく私も君のところへ行く」と漏らして周囲をギョッとさせたが、その言葉通り、3ヶ月後に亡くなってしまった。

日本フィルは民間放送局の専属オーケストラであり、盟友バーンスタインが「ヤングピープルズコンサート」など、メディアを利用した音楽の普及番組で自ら語り手を務めた実態もつづさに見ていた。文化放送の「東急ゴールド・コンサート」だけでなく、59年に開局した系列局フジテレビの音楽番組でも、渡邊は日本フィルを指揮し、柔らかく纏(うんちく)蓄に富んだ語りで多くの音楽ファンの心をとらえた。個人的な話ながら、筆者も小学校2年生(8歳)だった66年ころ、NHK総合テレビの音楽番組で渡邊が指揮する交響詩《フィンランディア》(シベリウス)を偶然見て、クラシック音楽の深淵な世界へと足を踏み入れた1人である。アメリカンスタイルの白いタキシードの上着を着こなし、真摯に素晴らしい音楽と向き合う姿は、かつてアツモンが「日本のカルロ・マリア・ジュリーニ」と評したように高貴ですらあり、子ども心にも強い印象を与えた。

61年にはテレビ番組で評判を呼んだシューベルトの「交響曲第8番《未完成》・第3楽章つき」を日本コロムビアが改めてスタジオ録音(7月11～12日、東京厚生年金会館)、同社との共同制作のシリーズ「日本フィル・ステレオ・ライブラリー」へと発展していく。その一環で62年につくられたシベリウス「交響曲全集」は世界初のステレオ録音の栄誉を担い、CRI盤の演奏に注目していた米メジャー、CBS(現在のソニー)の「エピック」レーベルを通じて世界で同時発売された。後にCD化された「未完成」やシベリウスの交響曲の初録音をいま聴き直しても、渡邊のトレーナーとしての耳の良さ、それだけにとどまらない品性確かな音楽のテイストをはっきり、認識することができる。

旧日本フィルの解散、分裂を経て日本フィルが再生の道を歩んでいた78年4月、渡邊は音楽監督・常任指

揮者に復帰した。復帰記念の第301回定期演奏会(4月8日、東京文化会館大ホール)のマーラー「交響曲第2番《復活》」のチケットは空前の入手難となり、急ぎよ追加公演が打たれた。CD化されたライヴ録音には、演奏会当日の熱気が見事に刻まれている。渡邊は日本コロムビアへの2度目、PCM(デジタル)録音によるシベリウス「交響曲全集」など多くの実績を残し、亡くなるまで日本フィルの偉大な「父」であり続けた。晩年のマーラーへの傾倒はつとに知られているが、最後の日本フィル定期演奏会(第417回=90年1月18&19日、サントリーホール)で指揮したのは、ブルックナーの「交響曲第7番」。音楽評論家の寺西春雄によるポニーキャニオン初出CDの解説書には「寺さん、ブルックナーの世界がようやくみえてくるようになった。彼の交響曲をこれからひとつひとつとりあげていってみたい」と、渡邊本人の希望が記されている。最後の瞬まで日本フィルの未来を信じ、ともに歩んだ生涯であった。

＝敬称略＝
(音楽ジャーナリスト 池田卓夫)

日本フィル創立指揮者
渡邊暁雄生誕100周年記念演奏会

2019/6/22 [土]
サントリーホール
指揮：藤岡幸夫

